

アダムの肋骨とマーヴェルの庭(前編)※

吉 中 孝 志

1655年、ミカエル祭の時期の第7日目、巡回中のクエイカー教徒ドロシー・ウォーは、「神に導かれて」カーライルの市場へ入り、十字架の下で「あらゆる虚偽と邪悪な行いに抗して」預言をし、説教をしていた。すると市の役人達がやって来て彼女を乱暴に引立てて行き、投獄した。まもなくして市長が現れ、彼女に尋ねた。

「どこから来たのだ」

「あなたがお住まいの[苦難と迫害の地]エジプトから」

そう答えた彼女に怒り狂った市長はもうそれ以上何も質問はせず、ただ部下の一人に鉄のさるぐつわ(‘the bridle’)を持って来るように命じた。ウォーはその時の様子を次のように記している。

それは鉄の帽子のようで、私の頭にピンで留めてあった帽子は乱暴にはぎとられ、服は破られ、私は彼らが呼ぶところのそのbridleを被せられた。それは重さが6キロ以上もあって三つの鉄の帯金が顔の前に来るようになっており、その一部分が私の口の中に押し込まれた。うまく語れないほど口に入れるにはあまりにも大きすぎ、それは私の頭に錠をかけるように固定されて、私は後ろ手に縛られ、6キロ以上の鉄の重さを頭の上に乗せて、喋ることができないように口のなかに突起が入れられた状態で彼らに命じられた間中立っていた。¹

これは、がみがみ女の轡、時に悪口の轡、婦人の轡、口うるさい女の兜などと呼ばれる刑具であった。それは正に「怒りっぽい女の口封じ」であって、

頭をすっぽり覆ってしまう一種の鉄の拘束具で、ひどく重く、罪人の口に、棘のついた鉄のはみ、あるいは舌状の鉄をかませるようになっていて、そのためもし罪人がしゃべろうとすれば口中がたちまち血だらけとなった。1665年に出版された本の中では、ラルフ・ガーディナーがニューキャッスル・オン・タインでの「アン・プライドルストーンなる女」の同様の処刑風景を次のように記録している。彼女は「町の官吏に通りを引き回され・・・轡という冠に似た鉄の刑具を頭にかぶせられ、轡に結んだロープの端を官吏が持っていた。大きな鉄のはみが押し込まれた口からは、血が流れていた。これこそ、口うるさく小言を言う女に、判事たちが科した刑罰なのだ。」² イングランドの博物館、教会、町役場などには、形もさまざまな五十を越える轡が残っており、その広範な所在地と数から、轡の刑が広く行われていたことがわかっている。チェスターフィールドの轡についてルエリン・ジューイットはこう説明している。「高さは約二十三センチ、直径は約十七センチほど。その轡は鉄の首輪と鉄の帯金からなっている。首輪の両側には蝶番があり、首の後ろには留め金がついている。帯金ほうなじから頭の上を通して口にいたるが、不運にしてこの刑を受ける女性の鼻がおさまるよう、前部は左右に分かれて穴が開いている。そして、轡をはめる方法は次のとおりである。まず蝶番により、首輪を両側に開き、帯金の後頭部部分を押し上げる。巡査が刑を受ける女性の前に立ち、はみ、またはナイフを口に差し込み、前部の穴から鼻を出す。ついで首輪を後部で締め、帯金を頭頂からうなじへ下ろして、首輪にしっかりとめておくことができたのである。かくして、またたく間に有無を言わせぬ拘束具ができあがり、拷問者は好きなだけ、しっかりとめておくことができたのである。首輪の左側には鎖がついており、鎖のもう一方の端についた輪で受刑者を引き回したり、柱や壁などつなぐところも思いのままであった。その前面に刻まれた年号は、一六八八年となっている。」³

この罰を受けるのは、必ずと言ってよいほど女性であった。女性は「貞節、寡黙、従順」であらねばならないという家父長制の築いた社会秩序のもとで、生まれながらにして卑猥でお喋りで反抗的な女性は、辱めを受け、黙らされ、

拘束されなければならなかったのである。企業家精神を持った牢獄の番人は一回二ペンスの料金を取って、はみをくわえたクエイカーの女預言者ウォーを見物させた。見せ物となった彼女の口の中に押し込まれたはみは、性的サディズムを刺激して男達にフェラチオを想起させると同時に、開いた物への栓を、じゃじゃ馬を慣らす文字どおりの轡を表し、男性優位社会を喧伝する客観的相関物となり得たわけである。

女性を、特にがみがみ女をコントロールするための装置として機能した刑罰としては他にも「水責めの刑」や「スキミングトン」などがある。前者は、滑車のついた竿の先に(‘cucking stool’ もしくは ‘ducking stool’ と呼ばれる)椅子をくりつけ、その椅子にがみがみ女を縛りつけて川や池に浸け、降参するまで水中に入れたり上げたりを繰り返す制裁である。‘【ロックスパー古謡集】には1615年頃から歌われていた「水責めの刑にあったがみがみ女の話」のバラッドが収められている。

この「小悪魔」は

騒々しい舌で、

近くに住む者も遠くに住む者も、

老人も若者も、すべての人々を悩まし続けた。

．．．．

この女の悪魔のような舌を

静めようとして、

警吏が彼女を大きな鳥籠に入れた。

ところががみがみ女は

前よりもっとすごい勢いでわめきだし、

警吏や周りの人々を

ののしった。

がみがみ女を「水責めの刑」にかけよう。

下着姿にされたがみがみ女の首の辺りには舌の絵がつるされ、荷車で川辺に連れて行かれ、竿の先にくくりつけた椅子に縛りつけられてから、水に浸けられる。彼女が川に浸けられる度に見物人はドラムを叩き、ラッパを鳴らしてはやしたてる。がみがみ女は六回水に浸けられた後、濡れネズミのような哀れな姿で引き上げられる。ところが彼女はこんな状態になっても依然として警吏をのしりつづけるので、またしても水に浸けられる。引き上げるととたんに彼女はまたののしり声をあげる。すぐにまた水に浸けられる。こんなことが12回ほど繰り返され、がみがみ女はついに降参し、その後二度とののしり声をあげることはなかった、というお話である。⁵ イギリスではこの風習は19世紀頃までつづき、1780年に出版されたベンジャミン・ウエストの『詩集』の中に「水責めの刑」と題された描写的な一編がある。

友よ、あの、かなたの池に立つものは、
水責め椅子なる刑具なり。
法の力でこの町の、
騒ぎと迷惑、制すなり。
もし騒がしき女がもめごと起こし、
髪ふり乱して悪口雑言吐いたなら、
ひとたびうるさき女が家のなかで
忌まわしき騒ぎを起こしたら
出てけ、椅子に座らせてやる、と叫べばよい、
口のきき方教えてやるぞ、と。
美しき罪人は椅子につく、
むつつりもったいぶって、堂々と。
ざぶりと深く、椅子は沈めども、
一度で目的を果たすにはいたらず。
水から上がった女はなおのこと、
前にもまして怒り狂う。

あたかも炎に水を注げば、
 かえって激しく燃え上がるがごとく。
 されば友よ、もう一度、
 女を池に放り込め、
 堪忍できなくなるよりも、
 三度、四度と繰り返せ。
 いかな騒々しい女、怒り狂った女とて、
 いかな熱い炎とて、水が冷やせぬものはなし。⁶

冬場、汚い池や川に浸けられる女性の側にとっては笑い事ではなかつただろうが、笑いに飢えた社会の中で女以外の構成員にとっては娯楽を提供する機会であったことは疑いなく、同時にがみがみ女は共通の恥的、人身御供となって男性優位の社会秩序を維持する働きを助けたのである。

手に負えない女を飼い馴らすことは、同様に娯乐的な要素を伴って、ヨーロッパ全体にわたってシャリバリと呼ばれる民衆の儀式のかたちでなされていたことが知られている。イギリスでは、特にサマセット州や北ウイルト州で「スキミングトン」(‘skimmington’)と呼ばれ、やがて南部でも行われるようになった制裁方法がある。妻ががみがみ女で夫が尻に敷かれている夫婦に対して行われたこの一種の集団いじめ的の刑罰をマーヴェルは「画家への最後の指示」の中で次のように描いている。

From *Greenwich* (where Intelligence they hold)
 Comes news of Pastime Martial and old,
 A Punishment invented first to awe
 Masculine Wives transgressing Natures Law,
 Where, when the brawny Female disobeys
 And beats the Husband till for peace he prays,
 No concern'd Jury for him Damage finds,

Nor partial *Justice* her Behaviour binds,
 But the just Street does the next House invade,
 Mounting the neighbour Couple on lean Jade,
 The Distaff knocks, the Grains from Kettle fly,
 And Boys and Girls in Troops run hooting by:
 Prudent Antiquity, that knew by Shame,
 Better than Law, Domestick Crimes to tame,
 And taught Youth by Spectacle Innocent! ⁷

ここでは本人たちが瘦せ馬に乗せられているが、通常は、隣人の男性ががみがみ女の妻に扮して、正に男女（おとこおんな）、‘Masculine Wife’ となって馬やロバに乗り、家事をとりしきる女性のシンボルである、バターやチーズを作るときにミルクを掻き回す棒や糸巻棒を持ち、別の隣人が扮する夫をこの棒で叩く。この時夫に扮する男は、たいてい馬やロバに後向きに座らせられ、群衆がはやしたてる中を行列が進んでいく。夫権制社会における結婚の規範を犯すカップルは、こうして隣人たちによってさらし者にされ、共同体への見せしめとなったのである。⁸

口うるさい女性は、男性優位の社会秩序に脅威となった。マーヴェルの時代に「自然の法」（‘Natures Law’）と成りおおせていた家父長制イデオロギーの根幹にあったのは神の法であった。言葉を持つことが許されたのは男性だけであり、女性には教会で話をする事さえ禁じられた、その教えは聖書に基づいている。

婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである。もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語るのは、婦人にとっては恥ずべきことである。

（「コリント人への第一の手紙」第14章第34-35節）

16、17世紀に数多く出版された、家庭内における修身教導書的な書物は、女性に、殆どいかなる状況においても沈黙を美德として命じることでこのイデオロギーを補強した。例えば、1598年の『神の御心に叶う理想の家庭』でロバート・クリーヴァーは、たとえ正当な怒りであっても夫に対しては畏敬の念をもってそれを自制するように促す。「妻は、じっと耐えねばならない。そして夫に対して不作法な、不親切な言葉を語ってはならない。ただいつも愛のこもった笑顔で夫を見、不機嫌そうになるよりむしろ自分に非を認めるべきである。」彼は、次のように第一コリントのパウロの言葉を言い換えている。

女性にとっての最良の飾りは「沈黙」である。従って人に教えることができるのは男性であって、女性は聞き手でなければならない。このことは、神によって定められている。だから、妻が夫から教示を受けるのは、神の命令である。⁹

この神の命令は「テモテへの第一の手紙」に記されている指示の言い換えでもある。

また、女はつましい身なりをし、適度に慎み深く身を飾るべきであって、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着たりしてはいけない。むしろ、良いわざをもって飾りとすることが、信仰を言いあらわしている女に似つかわしい。女は静かにして、万事につけ従順に教を学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない。むしろ、静かにしているべきである。なぜなら、アダムがさきに造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、あやまちを犯した。しかし、女が慎み深く、信仰と愛と清さとを続けるなら、子

を産むことによって救われるであろう。

（第2章第9－15節）

がみがみ女への嫌悪を含めた全ての女嫌いの言説、そして16、17世紀の家父長制イデオロギーは、その影響力の点で最も重要な根拠を創世記の記述に置いた。しかしながら創世記自体も複数の作者の手によるものであることからエバの創造に関しては相矛盾する記述がなされていることは指摘されねばならないだろう。一方で、神をエロヒムと呼ぶ作者は、アダムとエバの創造が同時であったかのように、第六日目に「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。」（第1章第27節）と言い、他方では、神をヤーヴェと呼ぶ作者は、エデンの園での人の創造を次のように記した。

また主なる神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」。・・・そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨のひとつを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。

（第2章第18、21－22節）

家父長制イデオロギーは前者によるエバの創造を、無視するか、巧みに釈明して、後者の記述を強調した。女性の創造は、男性の必要を満たすために仕方なくなされ、女性の存在は彼女自身のためではなく、男性の付属物として、ただ「助け手」（‘help meet’）としてのみ意義あるものとされたのである。さらに、後者の記述では、もはや女性は神のかたちではなく、男性の一部から造られたにすぎなくなる。彼女は男性よりもさらに劣った、不完全な生き物であって、エバの墮落に纏わる話しは女性の道徳的な弱さや破滅をもたらす影響力を証することになる。そしてアダムの最初の罪は、彼の妻の言葉に耳

を傾けたことにあるのである。かくして神の「女」に対する言葉「あなたは夫を慕い、彼はあなたを収めるであろう」（創世記第3章第16節）にあらわされた従属関係が成立するわけである。1632年に出版された『女性の権利に関する法の決議』も、16世紀の女性達に書かれた殆どの礼儀指南書と同様、墮落に係わるエバの罪を論拠として女性が従属的立場をとらなければならない必然性を説いている。創世記第3章第16節を引きながら著者は「あなたの願いはあなたの夫の支配下にあり、夫はあなたを収めるのです」というのである。¹⁰

女性が劣った存在だという議論は、中世においてしばしば繰り返され、強調された。例えば、トマス・アクィナスは、女性というものが、種としては人間に属するとしていたから、女は本当に人間であるか否かという問題を後にヴィッテンベルクで論じていたルター派の神学者たちよりはましであったとしても、女は自然における「奇形」だと決めつけて、「個々の性質に関して言えば、女は欠陥のある存在であり、生まれ損ないである。」（『スンマ・テオロギア』第4巻第1部）と言っていた。これはアリストテレスの生物学から採用した考えであって、彼によれば生殖の際に男性要素が、あまりに幼すぎるとか歳をとりすぎているとか、その他の理由で、不幸にも支配的でなかった場合、通常は男性が生まれてくるはずのところ欠陥のある男性として女性が生まれてくるというのである。アリストテレスの考えでは、女性の生殖、生産における役割はあくまで受動的、孵卵器的な役割を担っているだけであって、父親から伝遺する魂とそれが与える設計図に物質を提供するだけである。

6世紀のマーコンの宗教会議において、司教達は、女性が魂を持っているかどうか投票で決めなければならなかった。¹¹ 女に魂があるのかないのかという議論は、17世紀になっても大真面目に取り扱われ得る議論であった。例えばマーストンは『飽くことなき伯爵未亡人』（*Insatiate Countess*, 1613）の中で登場人物にイザベラ伯爵婦人にこう言わせている。

Farewell, thou private strumpet, worse than common!
 Man were on earth an angel but for woman.
 That sevenfold branch of hell from them doth grow,
 Pride, lust, and murder, they raise from below,
 With all their fellow-sins. Women are made
 Of blood, without souls ...¹²

また、ジョン・ダンは、書簡詩「ハンティントン伯爵婦人へ」の冒頭で創世記第1章第7節「主なる神は土のちりて人を造り、命の息をその鼻に吹きいれた。そこで人は生きた者となった」に言及しながら、女性が創造された時点から劣った存在であって、教会や国家の職務から除外されていることを歌った。

Man to Gods image, *Eve*, to mans was made,
 Nor finde wee that God breath'd a soule in her,
 Canons will not Church functions you invade,
 Nor lawes to civill office you preferre.¹³

1647年、ヘンリー・ネヴィルが、政治に口を出す女性たちをからかった『国会に、再び、招集されたご婦人方』においても同じ議論が下敷きになっている。

A complaint was brought in against one *Paul Best*, who had broached many damnable, and hereticall Doctrines, amongst the rest one was, that women were incapable of eternity, as wanting that immortall substance, which was injected into Adam, to wit the soule; and his reason was, for that he read that God breathed into Adam, and he became a living soule; but woman was made of man, participating only of his earthly substance, no mention of any

soule infused into her; for he said woman was ordained only for the earth, but man only for heaven, and this he said was that reason that women were so sensuall of such ravenous, and insatiate appetites, being like other creatures only of the earth, earthly: the house having heard the contents of the complaint, became greatly intraged, and ordered that the bookes or pamphlets, which the said *Paul Best* had compiled, and divulged, maintaining the error, should be gathered together, and openly burnt by the common hangman, himselfe to be kept close Prisoner till further order, and in the meane time a Declaration to be set forth evidently providing that women have soules; the chiefe argument to be this, that seeing the Divell is a spirit without a body, and yet is capable of eternity; so women being bodies without soules, may also be capable of eternity.¹⁴

17世紀中葉に異端を唱える多数のセクトが群れていた状況は後の我々のマーヴェルの「庭」に関する議論と深く関わってくるが、ここでは女達が結局のところ自分たちには魂がないことを認めてしまっていること、彼女たちの論理的思考能力のなさが笑われていることに注意しておこう。ダンが女性の魂について論じている時に、女性はしゃべる能力を肉体的道具（‘their bodily instruments’）に負っていること、しゃべる為には男性と同じ魂を必要としないこと、猿の心臓でも山羊のでも狐のでも蛇のでも、もしそれが女性の胸の中に置かれ舌を与えられれば、同じようにしゃべるだろうということを科学的論理の帰結として述べていることを思い出す必要があるだろう。¹⁵

女性の欠陥ぶりを論じる議論は、彼女らに理性的な思考を司る、不滅の魂がないという神学的推論と、さらに神学的生物学とでもいうべき、彼女らの出自の議論に係わっている。15世紀末にドミニコ会士ヤーコブ・シュブレンガーは、『魔女の鉄槌』の中で女性が本質的に生まれ損ないの人間であるというトマス・アクィナスの理論を展開させて「最初の女が造られたときに欠陥があったということが銘記されるべきである。なぜなら彼女は曲がった肋

骨から造られたからである。つまり、胸の肋骨からであり、それはいわば男に逆らう方向へ曲がっているのだ。」と言う。¹⁶ 1615年に出版されてから1637年までの間に10版を重ねる程の人気を博したジョゼフ・スウェトナムのパンフレット『淫らで怠惰、生意気で不貞な女たちに対する糾弾』も同様の指摘をしている。

[Moses] also saith that they were made of the rib of a man, and that their froward nature showeth; for a rib is a crooked thing good for nothing else, and women are crooked by nature, for small occasion will cause them to angry.¹⁷

実は、16世紀中頃に出されたエドワード・ゴーズインヒルの『女性の学舎』でも同じようにアダムの肋骨に言及がなされていた。ここでは骨の形状のみならずその硬い性質が女性の頑固さ、不従順さと重ねられている。

“Made of a bone ye said were ye;
 Truth it is I cannot deny.
 Crooked it was, stiff and sturdy,
 And that would bend no manner of way;
 Of nature like, I dare well say,
 Of that condition all women be,
 Evil to rule, both stiff and sturdy.

さらに、ゴーズインヒルは意地悪く、茶化すようにアダムの肋骨からエバが造られたという話は正確ではないと言い始める。彼の説によれば、犬がその骨をくわえて逃げ去り、食べてしまったので、神は、犬の肋骨から女を造らざるを得なかった。それゆえ、女は「夫に向かって吠え、わめく、ノ駄犬が、何でもないことに、吠えわめくように。」(‘at her husband doth bark and bawl, /

As doth the cur, for nothing at all.’) というわけである。¹⁸

トマス・ブラウン卿のように「男性は世界の全てであって、神の息。女性は肋骨、男性の歪んだ部分」（‘man is the whole world and the breath of God, woman the rib and crooked piece of man’）¹⁹ と言い続けられる男たちがいる一方で、17世紀に入ってからパンフレット戦争のさなか、アダム肋骨論議は女性擁護の立場からの論客によって再解釈されざるをえなかった。例えば、1617年に出版されたレイチェル・スペイトのパンフレット『メラストマスのための口輪』はスウェトナムに向けられた最初の反撃であったが、その中で彼女は、エバがアダムの頭や足からではなく心臓に一番近い肋骨から造られたことが重要で、それは「男性の心の近く、彼と平等であること」（‘near his heart, to be his equal’）を神が意図したのだと主張した。²⁰ こういった男女平等思想は、キリストの下にあって男女の魂が同等の価値をもつという信念に裏打ちされ、17世紀中葉に向けて水平派（Leveller）の女性たちを中心に発展していった。²¹

スウェトナムの『淫らで怠惰、生意気で不貞な女たちに対する糾弾』への反論としてエスター・サワナムが書いた『エスターはハマンを絞首刑にした』と題されたパンフレットで、サワナムは「ジョゼフ・スウェトナムは土と塵で造られたアダムに由来するのだから、同じように彼は泥だらけで汚い性質を持っている」とスウェトナム流の類推でやり返し、さらにスペイトと歩みを揃え、

God intended to honor woman in a more excellent degree, in that he created her out of a subject refined, as out of a Quintessence. For the rib is in Substance more solid, in place as most near (so in estimate most dear) to man's heart, which doth presage that as she was made for an helper, so to be an helper to stay, to settle all joy, all contents, all delights to and in man's heart

と主張する。サワナムに言わせれば、エバがアダムの後に造られたのは、彼女の劣性を示すのではなく、むしろ神の目には男性は女性なしでは不完全な存在として映ったからであり、神の最後の、つまり最も完成された、創造の業の結実としての女性という助け手が必要だったということの意味するのである。²²

しかし、女性擁護の立場よりも女嫌いの伝統は古く、根深い。神をヤーヴェと呼んだ創世記作者がエバと墮落の話を書く約3世紀前にヘシオドスは『神統記』の中で、バンドラに由来する「死すべき定め男性達の間で、彼らの大きな悩みの種となって生きており、憎むべき貧困のさなかにあっては少しも助け手とはならず、富んでいるときのみ助け手となる、女という、死をもたらず種族」について言及している。²³この女嫌いの言説はマーヴェルの時代まで連綿と流れ続ける。アウグスティヌスにとって女が男の友人や助け手であることは不可能であった。彼は、いったいなぜ神が女を創造したか困惑しているかのように「アダムが必要としていたのが良い仲間や良い会話であったのであれば、男と女ではなく、友人である二人の男がいるほうがずっと良かったであろう。」と言った。²⁴アキナスもアウグスティヌスの意見を繰り返し、おそらく女性は創造されるべきではなかったのかもしれないと感じながらも、生殖の業においては助け手となるはずで、そのことによって、男性がもっと高い目的に、すなわち知的活動のために時間を用いて、生殖、出産にかかわらないですむように女性が存在するのだと考えた。²⁵

ダンもまたアウグスティヌスを受けて、女はただ子孫を増やすためのみに、また墮落後は男の性欲を除くことにおいて、助け手と成りうるものであって、もしも神が種族の繁栄を個人のそれよりも重くみられなかったならば、「男は一人でも充分うまくやっていけたらう」と言う。女は自分が男の脇腹から取られたのであって頭から取られたのではないことを覚えておくべきであるとダンは述べる。それ故に「女は充分男を弱めているのだから、助け手となるためにできることは何でもするべきなのだ」と。²⁶

シェイクスピアの『シンバリン』の中で、自分の妻が裏切っているかもし

れないと信じこまされてポスチューマスが女の助けなしには男が生まれてこないことを「女のある部分が俺の中にもあればいいのに！」（‘Could I find out / The woman’s part in me’）²⁷ と言って嘆く時、また、チョーサーの尼僧付けの僧が「女の忠告ってのはしばしば致命的なものです。女の忠告がわれわれを最初に悲惨な境遇に導きました。そしてアダムを、とても楽しく満足して暮らしていた楽園から追い出したのです。」（‘Wommannes conseil broghte us first to wo / And made Adam fro Paradys to go, / Ther as he was ful myrie and wel at ese.’）²⁸ と言ったことを思い出す時、そして、ミルトンが後に『失楽園』の中でアダムに

O why did God,
 Creator wise, that peopled highest heaven
 With spirits masculine, create at last
 This novelty on earth, this fair defect
 Of nature, and not fill the world at once
 With men as angels without feminine,
 Or find some other way to generate
 Mankind? ²⁹

と言って嘆かせるのを読む時、我々は、まさにこの女嫌いの伝統の中でマーヴェルが「庭」を書いたことを確認するわけである。

Such was that happy Garden-state,
 While Man there walk’d without a Mate:
 After a Place so pure, and sweet,
 What other Help could yet be meet!
 But ’twas beyond a Mortal’s share
 To wander solitary there:

Two Paradises 'twere in one
To live in Paradise alone.

(II. 57-64)

この連を引用した後で、著書『マーヴェルの庭』において川崎寿彦は「これはマーヴェルの女嫌いの性癖をもっとも明瞭に表した詩句である。彼は実際に終生妻をめとらなかったのであるから、ここに表現された思想がただの言葉の遊びではないことは確かである。しかしわれわれはこの詩句をたんに個人的な女嫌いの感情だけを表現するものと解してはならない。西欧ルネサンスでは、女嫌いにも思想的背景があったのである。そしてこの場合それはふたたびあのヘルメス思想の背景であったようだ。」と言った。この指摘はほぼ正確であると思う。しかし、およそ四半世紀前のこの説明には、少なくとも加筆すべき事柄が生じて来ていると私は考えている。川崎の言う「ヘルメス思想の背景」とは、マーヴェルの主人フェアファックス卿などのようなヘルメス主義者が理解していた、もともと人間は両性具有であって、その段階を終わって男・女に分かれ、増殖の段階に入ったときに性愛の情熱という逃れがたい呪いを背負った、という思想であり、マーヴェルはこの連でも、性愛の情熱から逃れるため「アンドロギュノス性の回復」を唱えているのだと川崎は示唆するのである。レーストヴィックの解釈が川崎の基礎であったように思われる。対韻連句‘Two Paradises ’twere in one / To live in Paradise alone’（「楽園にただ一人住めるなら／二つの楽園を一つにしたに等しいだろうに。」）は、「人間の生殖器を‘Paradise’と呼ぶひそかな慣習に従って、アンドロギュノス・アダムの両性具有の生殖器への『洒落た言及』になっているのかもしれない。」と言うのである。³⁰

ただ、我々は、「アンドロギュノス性の回復」志向が性愛の情熱から逃れたいという願望に結びついているとしても、この結びつきは、既に観てきたように、例えば、シェイクスピアのポスチューマスの台詞、‘Could I find out / The woman’s part in me’ に観られるように、必ずしもヘルメス主義だけを前

提とするのではないということは注意しておかなければならない。生殖ということだけが、男性にとって女性を助け手として必要とせざるをえない不可避の宿命ならば、そして人間の性愛の情熱を悪として避けたいと願うならば、当然の論理的帰結として両性具有の思想が想起されるか、はたまた人間の性行為とは違った、例えば、マーヴェルが「庭」の別の箇所で示唆しているような、樹木性愛を志向し始めるのは必然と言わざるをえないだろう。トマス・ブラウン卿のように

I could be content that we might procreate like trees, without conjunction, or that there were any way to perpetuate the world without this trivial and vulgar way of coition. It is the foolishhest act a wise man commits in all his life, nor is there anything that will more deject his cooled imagination when he shall consider what an odd and unworthy piece of folly he hath committed.³¹

という思いである。しかしながら、マーヴェルの樹木性愛は妙にエロティックで、本当に性愛の情熱そのものを逃れたいという気があるのかどうか怪しくなってくるところがある。「終生妻をめとらなかつた」マーヴェルの「個人的な女嫌いの感情」は、近年の研究では同性愛的性癖を読み取る方向へ向かっている。伝統的に、女嫌いはキリスト教の神経症的セックス嫌いと結び付けられてきた。しかしマーヴェルの場合、セックスは良くて、ただ女が駄目という可能性があるというわけである。ポール・ハモンドは、

Apollo hunted *Daphne* so,
Only that She might Laurel grow.
And *Pan* did after *Syrinx* speed,
Not as a Nymph, but for a Reed.

の詩行にマーヴェルの男性志向を読み取っている。つまり、「この女性たちが実際に変身しているのは男性性の象徴へである。すなわちアポロの月桂樹とパンの男根的葦笛である。」と言うのである。男性の神々が追い駆けるのは、女性でも、植物でもなく、最終的にはその男性性だということである。²

マーヴェルの女嫌いを再考する場合、このホモ・エロティシズムの問題は避けて通れないが、敢えてここでは、今まではっきりと論じられなかった問題、17世紀的な問題を考えようと思う。この小論の以下の部分では、マーヴェルの「庭」が書かれた、その庭の周りにいた女性達に目を向けることでマーヴェルが提示した女嫌いに関して、その新たな理由を提案したい。

注

1. 'A relation concerning Dorothy Waugh's cruel usage by the Mayor of Carlisle' (1655) in *The Lambs Defence Against Lyes. And a True Testimony given concerning the Sufferings and Death of James Parnell* (London, 1656), p. 29, rpt. Hilary Hinds, *God's Englishwomen: Seventeenth-century radical sectarian writing and feminist criticism* (Manchester: Manchester U. P., 1996), p. 227. 一部間接話法を直接話法にした箇所がある。
2. アリス・モース・アール、エドワード・ペyson・エヴァンズ著、神鳥奈穂子、佐伯雄一 訳『拷問と刑罰の中世史』(東京、青弓社、1995年) 90-91頁。
3. 同上 94頁。がみがみ女の轡に関する図版、写真については、例えば、川端博監修『拷問の歴史 ヨーロッパ中世犯罪博物館』(東京、河出書房、1997年) 128-134頁を参照せよ。
4. 1645年にロンドンで出されたパンフレットの題名、*The Dippers dipt. Or, The Anabaptists Dvck'd and Plvng'd Over Head and Eares, at a Disputation in Southwark* は、急進派セクトと女性とお喋りな女性にあてがわれることの多かった刑具との重なりを集約している。
5. 楠 明子『英国ルネサンスの女たち シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』(東京、みすず書房、1999年) 87-90頁。
6. アリス・モース・アール他 前掲書 23-24頁。
7. 'The Last Instructions to a Painter', ll. 375-389. マーヴェル作品からの引用は全て、

The Letters and Poems of Andrew Marvell, ed. H. M. Margoliouth, revised by Pierre Legouis with the collaboration of E. E. Duncan-Jones (Oxford: Clarendon Press, 1971) に拠る。

8. ナタリー・Z・デーヴィス著、成瀬駒男他 訳『愚者の王国、愚者の都市』（東京、平凡社、1987年）134-199頁。E. P. Thompson, “‘Rough Music’: Le Charivari Anglais’, *Annales ESC*, 27 (1972), pp. 285-312; Martin Ingram, ‘Ridings, Rough Music and Mocking Rhymes in Early Modern England’, in *Popular Culture in Seventeenth-Century England*, ed. Barry Reay (London: Routledge, 1988), pp. 166-197.
9. Robert Cleaver, *A Godly Form of Household Government* (London, 1598), p. 214, sig. G4v.
10. *The Law’s Resolutions of Women’s Rights* (London, 1632), rpt. in *Daughters, Wives, and Widows: Writings by Men about Women and Marriage in England, 1500-1640*, ed. Joan Larsen Klein (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1992), p. 32.
11. St. Thomas Aquinas, *The Basic Writings*, ed. Anton C. Pegis (New York: Random House, 1945), i, 879-881. Aristotele, *The Generation of Animals*, trans. A. L. Peck (London: Heinemann, 1943), pp. 103, 113, 131-133, 391, 401, 403, 461. カレン・アームストロング著、高尾利数 訳『キリスト教とセックス戦争 西洋における女性観念の構造』（東京、柏書房、1996年）97、99頁。
12. John Marston, *The Works*, ed. A. H. Bullen (London: John C. Nimmo, 1887), iii, 199.
13. John Donne, ‘To the Countesse of Huntingdon’, ll. 2-5. *The Satires, Epigrams and Verse Letters*, ed. W. Milgate (Oxford: Clarendon, 1967), p. 85. See also pp. 247-248.
14. Henry Nevile, *The Ladies, A Second Time, Assembled in Parliament. A Continuation of the Parliament of Ladies. Their Votes, Orders, and Declarations* (London, 1647), pp. 9-10.
15. John Donne, *Problems*, 2. ‘Why hath the Common Opinion Afforded Women Soules’, *Selected Prose*, ed. Neil Rhodes (Harmondsworth: Penguin, 1987), p. 53.
16. カレン・アームストロング著、高尾利数 訳『キリスト教とセックス戦争 西洋における女性観念の構造』139頁。
17. Joseph Swetnam, *The Arraignment of Lewd, Idle, Froward, and Unconstant Women* (London, 1615), rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1985), p. 193.

18. Edward Gosynhill, *The Schoolhouse of Women* (London, 1541?), rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640*, pp. 148-149. 女性は実は男性の尻尾から造られたという説もある。Katharine M. Rogers, *The Troublesome Helpmate: A History of Misogyny in Literature* (Seattle: Univ. of Washington Press, 1966), p. 106, note 4を見よ。
19. Sir Thomas Browne, *Religio Medici Hydriotaphia*, and *The Garden of Cyrus*, ed. Robin Robbins (Oxford: Clarendon Press, 1972), p.76.
20. Rachel Speght, *A Mouzell for Melastomus* (London, 1617), p. 66. エバがアダムの肋骨から造られたことに関する好意的な解釈は本来、ルネサンス期のヒューマニズム的なものであるように思われる。例えば、エラスムスは、次のように言っている。‘... at the beginning when He had made man of the slime of the earth, he thought that his life should be utterly miserable and unpleasant, if he joined not Eve, a companion, unto him. Wherefore He brought forth the wife not of the earth, as he did man, but out of the ribs of Adam, whereby it is to be understood that nothing ought to be more dear to us than the wife, nothing more conjoined, nothing more fast glued unto us’ (Erasmus, *A Right Fruitful Epistle ... in Laud and Praise of Matrimony*, 1518, trans. Richard Taverner [London, 1536?], rpt. *Daughters, Wives, and Widows*, ed. Joan Larsen Klein, p. 73.
21. Stevie Davies, *Unbridled Spirits: Women of the English Revolution: 1640-1660* (London: The Women’s Press Ltd., 1998), p. 84.
22. Esther Sowernam, *Esther hath hanged Haman* (London, 1617), rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640*, pp. 39, 223-224. 創造の順番は重要性の順番であるという議論は男尊女卑の言説に利用されてきた。例えば、‘... I give no license to a woman to be a teacher, nor to have authority of the man, but to be in silence. For Adam was the first made, and after, Eve’ (Juan Luis Vives, *A Very Fruitful and Pleasant Book Called the Instruction of a Christian Woman*, 1523, trans. Richard Hyrde [London, 1529?], rpt. *Daughters, Wives, and Widows*, ed. Joan Larsen Klein, p. 102; ‘Contest not with your head for preeminence; you came from him, not he from you’ (Richard Brathwaite, *The English Gentlewoman* [London, 1631], rpt. *ibid.*, p. 245.
23. Hesiod, *The Homeric Hymns and Homerica*, trans. Hugh Evelyn-White (London:

- Heinemann, 1943), p. 123.
24. カレン・アームストロング著、高尾利数 訳『キリスト教とセックス戦争 西洋における女性観念の構造』96頁。
 25. St. Thomas Aquinas, *The Basic Writings*, ed. Anton C. Pegis, i, 879-81.
 26. John Donne, *The Sermons of John Donne*, ed. George R. Potter and Evelyn M. Simpson, 10 vols. (Berkeley: Univ. of California Press, 1953-62), ii, 338, 343-46: 'She was not taken out of the *foot*, to be troden upon, nor out of the *head*, to be an overseer of him; but out of *his side*, where she weakens him enough, and therefore should do all she can, to be a Helper'.
 27. William Shakespeare, *Cymbeline*, Act 2, Scene 5, ll. 19-20. *The Riverside Shakespeare*, ed. G. Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974), p. 1535.
 28. Geoffrey Chaucer, *The Nun's Priest's Tale*, *The Riverside Chaucer*, ed. F. N. Robinson (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987), p. 259.
 29. John Milton, *Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler (New York: Longman, 1986), Book X, ll. 888-895, p. 554.
 30. 川崎寿彦『マーヴェルの庭』(東京、研究社、1974年)130-131、110頁。
 31. Sir Thomas Browne, *Religio Medici Hydriotaphia*, and *The Garden of Cyrus*, ed. Robin Robbins, p. 76.
 32. Paul Hammond, 'Marvell's Sexuality', *The Seventeenth Century*, 11 (Spring, 1996), p. 111.

※この論文は、平成12年度科学研究費補助を受けた基盤研究Bの2による研究成果の一部であり、同年6月17日に十七世紀英文学会関西支部第139回例会において口頭発表した研究報告の一部でもある。

The Rib of Adam and Marvell's 'The Garden' (Part I)

Takashi YOSHINAKA

Marvell's misogynistic attitude characteristically manifested in 'The Garden' has been linked sometimes with Hermeticism, but more frequently with a Christian tradition fashioned and supported by patriarchal ideology, and most recently with the poet's homoeroticism. This paper, focusing on the poet's surroundings in the middle of political turmoil of the mid-seventeenth century, proposes two other possible causes for his attempt to exclude women.

The first part of this essay explains the ideological significance of widespread torture of shrews such as using bridles or cucking stools, and of social control operated by, for example, the custom of skimmington. It also illustrates the way in which the discourse of patriarchy defines women as, both biologically and theologically, men not properly born and created without soul. One important point for the rest of our argument is that before Marvell expresses his dislike for womankind in his poetry the seventeenth-century feminist reaction has already begun by giving different (and, for some, radical) re-interpretations to Eve's position as Adam's mere helpmate created from his rib.